

<国富論>

アダム・スミスの「国富論」読み終わりました。何とも予想を遥かに超える面白さ、十分堪能しました。

とはいえ文庫本で3冊、本文だけで1,541ページもある大作です。多分2ヵ月くらいかけて楽しんだことになりそうです。何せ読むのは朝晩の会社の行き帰りの時間と、夜布団に入ってから寝るまでのチョットの時間と、あとは土曜日の昼寝の合間の時間だけですから。

国富論もいくつか翻訳が出ていますが、私が読んだのは中央公論社から出てる文庫本のもので、去年か一昨年か、この本の新しい訳が出たということで話題になったのを機にいくつか見てみたんですが、文庫本なので「安くて軽い」ということと、かなり絵が入っているということで、中公文庫版を選びました。元々は中央公論社で「世界の名著」シリーズの1冊として部分訳が出ていたのを、その後全訳したものだけということです。

「世界の名著」ということで絵が入っていたのを、そのまま全訳でも同様に絵を入れたようです。びっしり文字が詰まったのを読んでいて、絵が出てくるとホッとします。絵はもちろん国富論の時代を表す産業革命の初期、あるいはアメリカの開拓時代などの絵です。

買ってから何度か中断してその都度頭から読み直したので、最初の方はすでに何回か読んでいます。最後に中断したのは思い出してみたら、去年入院した時でした。

入院してじっくり本が読めるので何を读もうかと考えた時、国富論を持って行けば入院中に読み上げることができそうだと思いますが、そうすると何も他の本が読めなくなりそうで、とりあえず国富論は後回しにして他の本を持って行ってしまいました。退院してからも入院中に読んだ本の続きでいろいろ読んでいて、なかなか国富論に戻れませんでした。何しろ1,541ページですから、取り掛かるのに覚悟が要ります。

で、読み終わったのですが、面白いのなんのって。

経済学の本というと、何となく【需要が右下がりのカーブで供給が右上がりのカーブで、その交わったところで値段が決まる】みたいなものを想像してしまうんですが、まるで違います。とにかく全てが具体的に書かれているんです。「需要が」とか「供給が」とかではなく、「小麦が」とか「ぶどう酒が」とか「塩が」とか「肉が」とか。イギリスでは・フランスでは・アメリカ植民地では・インドでは・中国では、あるいは古代ギリシャでは、ローマ時代には……という具合です。

輸入や輸出の話になると当然のように密輸の話が出てきますし、税金の話になると当然のように脱税の話になります。

「国富論」というと「神の見えざる手」というのが有名ですが、実際に読んでみるとこの通りの言葉は書いてないんですね。「神の」なしの「見えざる手」というのが、ちょうど全体の真中あたりに1箇所だけ出てくるだけなんです、「神の見えざる手」の考え方、すなわちそれぞれ皆が自分の利益のことだけ考えて一生懸命がんばると、それで全体にとって一番良い結果につながるという考え方は繰り返し、いたる所に出てきます。それも個々の具体的なケースについて。

私は以前から、ヨーロッパというのは一体何なんだろう、どうやってできたんだろうと思って、色々解説書とか歴史の本とか読んでいたんですが、その面でも今まで読んだ本の中で「国富論」が一押しです。ギリシャ・ローマの時代から国富論が書かれた時代まで、主にヨーロッパですがインドや中国も視野に入れ、また南北アメリカの植民地も含めてどのように発展し、現状どうなっているかが解説されています。

ヨーロッパでは「都市」というのが非常に特殊な存在なのですが、それがどのようにでき、発展し、力を持つようになったかについても、とてもわかりやすく解説されています。

あるいは「ユニバーシティ」というのは今では大学のことですが、元々は同業組合のことで鍛冶屋のユニバーシティとか仕立屋のユニバーシティとか言っていたんだ・だから大学に入って7年間徒弟修業をするとイッチョマエの職人になって人に教える資格が取れたんだ・・・なんてことも私には初耳でした。

書いてある事実は非常に具体的で客観的なんですけど、主張は基本的にイギリスはどうするのが一番良いかという視点が明確になっています。ヨーロッパの中ではフランスよりイギリスの方がうまく行っているし、その他の国と比べればフランスが一番うまく行っているという評価ですが、でもイギリスがもっと良い国になるためにこうすべきだという主張が至る所に出てきます。

イギリスもイングランドとスコットランドが一緒になってすぐの頃で、アダム・スミスはスコットランドの方の人ですからイングランドについても客観的に見ていて、でもスコットランドと一緒になった以上、イングランドも応援しなきゃといった所です。

この国富論が書かれたのがちょうどアメリカの独立戦争が始まった時で、この本の中ではアメリカは一貫して植民地ですし、独立戦争は「今回の動乱」みたいな表現になっています。この本が版を重ねるにつれて独立戦争が終わり、アダム・スミスが亡くなる頃いよいよフランス革命が始まります。

この本の最初でアダム・スミスは分業の効用をさかんに強調しているんですが、この本が書かれたのはまだ産業革命も初期の初期の頃で、分業の例になっているのもピンの製造業です。蒸気機関についても、ボイラーとシリンダーの間のバルブをピストンの上下に合わせて開け閉めするのに少年が雇われて手でやっていたのを、少年が仲間と遊びたいばかりに紐を使って自動的に開け閉めするように工夫したなどという、本当にのどかな話を書いてあります。

全て価値を生み出すのは労働だけだという「労働価値説」とかいう理論があります。私はこれはマルクスの資本論の世界だとばかり思っていたんですが、これが実は国富論に書いてあるというのも私には発見でした。若い頃社会科の勉強をさぼっていると、こんな具合に後になって楽しく勉強できるという、ご褒美にあずかれるということです。

最後の方には税金の話と国の借金の話が出ています。戦争か何かで急にお金が入用になると、税金で賄うわけにはいかず、とりあえず借金することになります。とりあえず利息だけ払って、元本は何年か後にまとめて払うということで、国債を発行します。

利息を払うために税金を増やすんだけど、元本の返済まではできません。そこで借り換え・借り換えで借金の返済を先延ばしするんだけど、そのうち面倒くさくなって「永久債」に借り替えて、元本の返済には期限をつけないことにします。いずれ気が向いたら返済するけれど、それまでは「何年かかろうと利息を払います」ということです。

でもそのうち利息を払い続けるのが嫌になって、「元利均等返済」を考えます。これを「年金」と称して、最初は「確定年金」。たとえば20年の元利均等返済なら20年の確定年金。そのうちもっと早く毎年の返済額を減らしたくなって、死んだらもう払わなくても良いように「終身年金」。さらにギャンブル性を高めて「トンチン年金」という具合に進化していきます。

一応私もアクチュアリーなので年金の計算は勉強していますが、日本では年金というのはあらかじめ保険料を払ってあとで年金を受取るものです。日本語の「年金」にあたる英語には「pension」

と「annuity」があつて、pension というのは「恩給」とか「退職年金」とか、要するに「ご褒美」とか「長年働いてくれて有難う」という意味を込めて払われるものです。そうではなく単に毎年一定額を払うのが「annuity」だという区別です。何となくしっくりこないものを感じていたんですが、要するに「annuity」というのは「国債の変形」したもので、元利均等返済(あるいは元本返済なしの利息払)という意味だと考えればようやくしっくり来ます。国の借金の返済(あるいは利払い)方式の一つが年金だということです。

スペインやポルトガルが、アメリカの植民地で山ほど金や銀を手に入れて、その結果ヨーロッパでも最も貧しい国になってしまったのはなぜか・・・などという議論も面白いものでした。

なお第1編の中になんかのページを使って、1200年から1750年までの5世紀半にわたる小麦の値段の推移を議論している所があります。小麦の値段は年によってかなりぶれるけれど、適当に平均してやると安定しているはずなので、その値段の変化は逆に貨幣の価値の変化を示しているという理屈で、貨幣価値が次第に減っていくのを示しているんですが、この当時のイギリスは貨幣はポンド・シリング・ペンスの時代で、1ポンド=20シリング、1シリング=12ペンスという20進法・12進法の時代です。これを足し算したり割り算したりして平均したりするのは結構面倒です。

また小麦の量は1クォーターあたりということなんですが、この1クォーターが8ブッシェルになったり9ブッシェルになったりするんで、「この値段は1クォーターが9ブッシェルの値段だから、1クォーターが8ブッシェルとするとその値段の9分の8になるから」なんて計算を、このポンド・シリング・ペンスでやるというのは、なかなか良い頭の体操になります。そんな頭の体操はしたくないという人は計算結果を丸呑みして読むか、思い切ってこの部分を飛ばしてしまっても良いかも知れません。

またアメリカ植民地について、その昔「漁業がアメリカ植民地の主要産業の一つ」だったなんて記述も、そう言われてみればそうかも知れないけど、聞いたことなかったなあと思いました。

この本がこんなに面白い本だということがわかっていたら、もっと早く読んでおくんだったと思います。今でもまだ遅くはないけど。

一度手に取って所々つまみ食いを読んでみると、引き込まれてしまうかも知れません。是非ともオタメンアレ。